ニコラス・セント・ジョン・グリーン
経歴と業績

デイヴィッド・J・サイプ
ボストン大学ロースクール

ニコラス・セント・ジョン・グリーンは、将来を大いに嘱望されながらも早世した傑出した弁護士にして、法律教師、そして法哲学者であった。グリーンは、1830年3月30日ニューハンプシャー州のドーヴァーで生まれた。家族に関する記録からは、彼はミドルネーム—発音はシンジン—で呼ばれていたものと思われる。父のジェームズ・D・グリーンは、ハーヴァード・カレッジを1817年に卒業し、組合教会派の牧師からユニタリアン派の牧師となり、マサチューセッツ州のリンとイースト・ケンブリッジで伝道した後、1847年にケンブリッジの新市政における初代市長に当選し、1853年と1861年にそれぞれ再選を果たしている。グリーンの母は下院議員を務めたこともあるニューハンプシャー州ドーヴァーのダニエル・M・デゥレル判事の一人娘であった。グリーンの叔父のエドワード・H・デゥレルは、南北戦争の前にはミシシッピ州とルイジアナ州のニューオーリンズで弁護士をしていたが、後にニューオーリンズの市長を短期間ながらも務め、リンカーン大統領によってルイジアナ地区の連邦地方裁判所判事に任命された人物である。1874年12月に退任するまで彼は1866年公民権法の実施に精力を傾けたが、このために民衆の支持を失ったと後に語っている。

グリーンは、ハーヴァード・カレッジで学んだ。2年生のとき、彼は警察の取り調べを受けている。ジャレッド・スパークスのハーヴァード学長就任式で学生と警察との間で小競り合いが生じた際、1人の警官を暴行したという容疑であった。(Springfield Republican, Jul. 2, 1849, p. 2) スパークス自身と2人の教授がこの喧嘩の証人であった。このような事件にもかかわらず、グリーンは1851年には文学士の学位を取得することができた。このときのクラスメートには、後にハーヴァード・ロースクールの学科長となるクリストファー・コロンブス・ラングデルがいた。また、後にハーヴァード・ロースクールの教授となるジェームズ・ブラッドリー・セイヤーとグリーンの親友でニューヨーク弁護士会の指導者となるジョセフ・H・チョートも1852年のクラスにいた。卒業後、グリーンは医学の勉強を始めるが、すぐに法学に転じ、1853年にハーヴァードで法学士の学位を取得した。1855年には、ホイッグ党の候補者としてケンブリッジ市議会の議員に選出されている。弁護士会に所属すると、ボストンの弁護士ベンジャミン・フランクリン・バトラーの事務所に雇われ、主に刑事弁護に携わった。グリーンの息子は、グリーンとバトラーが「互いに不遇をかこち、ビーコン・ヒルの貴族気取りの人々—バトラーは彼らのそうした態度を攻撃することを喜びとしていた—を嫌悪する点において同類であった」ことを覚えている。(Wiener, 9 J. Hist. Ideas 70, 72 (1948).) グリーンが弁護人となった1858年の事件はよく知られている。「ボストンの生活」と題する猥褻な印刷物を頒布した罪で

出版者が起訴された事件である。グリーンは、問題の印刷物が店舗や家庭に飾られている絵画や彫刻などの芸術作品と比べ猥褻さや卑猥さの点においてほとんど変わるところがないと主張したのである。(Boston Herald, Jan. 22, 1858, p. 2.) 1861年1月24日、グリーンはボストンの薬問屋の娘コーネリア・ヘンショーと結婚する。

1861年4月に南北戦争が始まると、事務所のパートナーであったバトラーは、直ちに准将として南軍に加わった。バトラーは民主党において精力的に政治活動も行っていた。将軍であった彼は政治的には数々の勝利を収めるが、軍事的には敗北を喫することになる。1861年6月、グリーンはバトラーとともに、ヴァージニア州ハンプトンのモンロー砦にいたが、そこでグリーンは法務官として5人の強盗容疑の兵士の弁護を行っている。彼の兄弟のデュレル・グリーンは南軍の大佐であった。1861年から1862年にかけて、グリーンはボストンにおける身体傷害と名誉毀損の事件でそれぞれ原告側の訴訟代理人を務めている。1862年が終わる頃までには、かつて事務所のパートナーであったバトラーは、ニューオーリンズ占領時に現地の白人をひどく扱ったことから南部の白人から「野獣バトラー」と呼ばれ、南軍の将軍の中で最も評価の分かれる将軍となっていた。グリーンと妻の間に第一子の娘—幼くして亡くなってしまう—が誕生すると、1863年8月、彼はバトラー指揮下の主計官となり、初めはワシントン特別区で、次にヴァージニア州ノーフォークで軍務についた。バトラーは1864年にリンカーンの再選を支持したが、再選後のリンカーンはバトラーを重用せず、1865年1月に解任した。グリーンは終戦まで主計官を続け、1865年5月に除隊となった。バトラーは、急進共和党から下院議員となり、ジョンソン大統領の弾劾手続を指揮し、1875年公民権法の起草に貢献した。

戦後、グリーンは弁護士業を再開した。グリーンとコーネリアのあいだには1865年に娘が生まれたが、この娘も1867年には幼くして亡くなってしまう。1868年と1870年にはそれぞれ息子が誕生している。息子たちは父と三人の姉妹と一緒にケンブリッジのブラトル通から脇へ入ったストーリー通8番地で暮らした。1866年には、グリーンは、「モルデン市の殺人犯」として有名なエドワード・グリーンの弁護人となり、刑の執行停止を求めている。これ以後も、彼の引き受けた事件で新聞に取り上げられるようなものは、ほとんどが連邦および州の刑事事件であった。グリーンは、ボストン裁判所庁舎の社交法律図書室に足しげく通ったが、そこでジョン・コッドマン・ロープス、ジョン・チップマン・グレイ、オリヴァー・ウェンデル・ホームズ・ジュニア、メルヴィル・マディソン・ビゲローそしてブルックス・アダムズといった法学者たちと親交を結ぶことになる。このグループのメンバーはいずれも著名人であったが、グリーンが最年長であった。1870年4月のニューヨークのダニエル・マクファーランドの殺人事件にかかわる衝撃的な裁判において、グリーンはマクファーランドと、被害者でニューヨーク・トリビューン紙の編集長であったアルバート・リチャードソンがかつて争った訴訟でマクファーランドの代理人であったことと、彼が心神喪失であることを証言した。1871年には、グリーンは、州議会は証人が刑事責任を負うことになるような供述を強制することはできないと主張した。1873年には、刑事裁判における理由なしの陪審員忌避に関する法案をマサチューセッツ州議会に提出した。

グリーンが初めて教壇に立ったのは1870年のことであり、ハーヴァード・カレッジの哲学と政治経済学の講師として、論理学、形而上学、心理学そして政治経済学を教えた。1870年1月、彼は最初の論文である「蓋然的原因と近接的原因」をアメリカン・ローレヴュー誌に匿名で発表した。本論文は高い評価を得たが、おそらくこのことから1870年4月にハーヴァード・ロースクールの講師に採用されたのであろう。ハーヴァードでは、グリーンは不法行為法を教える最初の講師となった。同年、彼はまた、C・G・アディソンの1860年の『不法行為または違法行為およびその救済の法に関する論考』の簡略版をハーヴァードの学生のために用意した。1871年にこのグリーンの本を評して、オリヴァー・ウェンデル・ホームズ・ジュニアは、「不法行為法は、法律書には不向きな科目であると思わざるを得ない」と述べつつも、グリーンが「有能な講師」であり、すでに「ケンブリッジにおいて賞賛に値する成功をおさめている」と付け加えている。(5 Am. L. Rev. 340, 341 (1871).) 1870年から71年にかけての学期では、グリーンは1年生と2年生の両方にそれぞれ不法行為法を教えたが、次の1872年から73年にかけての学期では、1年生のみに不法行為法を教えた。1871年から72年の学期と1872年から73年の学期では、グリーンは刑法もハーヴァードで教えている。彼の成績評価は厳しく、担当した6クラスのうちの2クラスにおいて、半数近くの学生に対して合格最低点しかつけなかった。当時、ハーヴァード・ロースクールの9人の講師のうち、グリーンと他の3名の法律教師のみが学科内の決定において投票権を有していた。1871年、グリーンは、民主党から州議会に立候補したが、共和党のチャールズ・F・ウォルコットに敗れた。ウォルコットはグリーンよりも若く、また准将として南北戦争を戦った人物であった。

1871年の初めと1872年を通して、グリーンはある討論クラブに参加した。メンバーは、ハーヴァードの心理学の講師チョーンシー・ライト、論理学者で当時ハーヴァード大学天文台に勤務していたチャールズ・サンダース・パース（1839生)、ボストンで弁護士をしていたオリヴァー・ウェンデル・ホームズ・ジュニア、そして、ハーヴァード医学校の卒業生で心理学に造詣の深かったウィリアム・ジェームズであった。また、時としてこのクラブに参加したのが、自由思想家でユニテリアン派牧師としてはキリスト教信仰心に欠けたとされたフランシス・エリングウッド・アボット、ジャーナリストであり、ハーヴァードで歴史学を教えながら大学図書館の司書補であったジョン・フィスケ、そして、当時まだハーヴァード・ロースクールの学生であったジョセフ・バングス・ワーナーといった人々であった。このグループにおいても、グリーンが最年長であった。アメリカの代表的哲学者となる道を歩むことになるパースは、後にこのグループを「形而上学クラブ」と命名し、このグループからアメリカ独自の哲学の学派であるプラグマティズムが誕生したとしている。ウィリアム・ジェームズの弟で著名な作家のヘンリー・ジェイムズは、1872年2月に、ウィリアムと「他のいろいろな分野の頭脳明晰な若者たちが集まって、形而上学クラブなるものを結成し、そこでは一定の論題を恐ろしいほどまでに徹底的に議論していた。論題は、ちょっと考えただけで頭が痛くなるようなものだった」と書いている。(チャールズ・エリオット・ノートンへの書簡)。パースは、それから35年後に、ニコラス・セント・ジョン・グリーンについて、次のように述懐している。

最も興味深い男であり、技量に長け学問にも秀でた弁護士で、ジェレミー・ベンサムの信奉者であった。使い古された陳腐な定式という覆いをはぎとり、生き生きとした真実を暴露するその類まれな力量によって、彼はいかなる話題においても注目を浴びていた。とりわけ、グリーンは[スコットランドの哲学者アレクサンダー・]ベインの信条の定義、すなわち、「人がそれに則って行動しようとするところ」という定義を応用することの重要性をしばしば強調していた。プラグマティズムというものは、ほとんどこの定義の帰結にすぎない。つまり、私は、グリーンがプラグマティズムの祖父であったと思わずにはいられないのである。(C.S. Peirce, Letter to the Editor of the Nation (1906 or 1907), in Collected Papers, ed. Charles Hartshorne and Paul Weiss, vol. 5 (Harvard UP 1934), paragraph 12.)

プラグマティズムを法に応用することで生み出された新しい考え方は、法の「予言理論」であり、これはホームズの1897年の有名なボストン大学での講演「法の道」によって知れ渡るところとなったが、実はホームズは早くも1872年の匿名のアメリカン・ローレヴュー誌の書評において「法律家にとって唯一の問題は、裁判官が将来いかに行動するかという点に尽きる」と述べていた。(6 Am. L. Rev. 723, 724.) グリーンもかつて同誌で匿名の名誉毀損に関する本の書評で「この問題に関する直近の判例が法を形作る」と書いていた。(6 Am. L. Rev. 593.) ジョン・チップマン・グレイも後に『法の性質と淵源』(1909年) において同じ考え方を発展させている。

パースは、グリーンを偲びながら、イギリスの偉大な功利主義哲学者であるジェレミー・ベンサムへのグリーンの傾倒ぶりに言及している。1876年の追悼文において、パースは、グリーンは「ベンサムの体系的著作にはほとんど関心を示さず、むしろコサック兵のようにベンサムが法の王国を急襲した一連のパンフレットに関心を寄せ、大いに楽しんでいた」と述べている(アメリカ科学振興協会)。グリーンのボストン大学における教え子であったサイラス・コッブは、追悼集会において、「法のもとでの人の権利というものが、自然権などではなく、まさに法による権利であることをグリーン先生が常日頃強調されていたことを我々は覚えてる」と述べた。(Boston Globe, Oct. 25, 1876.) ベンサムの次の言葉は有名である。「自然権、つまり自然かつ奪われることのない権利などというのはただのナンセンスである。レトリックのナンセンス、荒唐無稽のナンセンスである。」(Anarchical Fallacies (1843).)

グリーンの後任としてハーヴァードで刑法を教えたエドワード・H・ベネットは、チャールズ川を渡り、新しいボストン大学ロースクールにその創設の1872年10月から参画したが、大学の広告ではグリーンも設立に参加すると予告されていた。1873年、グリーンはボストン大学の教授職就任を引き受けた。ハーヴァードの方が報酬は高かったが、彼は同級生のラングデルがハーヴァード・ロースクールに導入していた教育改革には反対であった。グリーンは、ボストン大学では不法行為法と刑法を教え、ケント・コメンタリーズについても講義した。創立時の学科長、ジョージ・ヒラードは、1874年に病いを患い、グリーンが1874年の4月から1876年に亡くなるまで学科長代行を務めた。彼は、ロースクールの外では、ボストンのビーコン通18番地で法律実務を続けた。彼はまた、法律専門家のための出版も始め、1874年にジョセフ・ス

トーリの『注釈代理法』第8版を補訂し、イギリスとアメリカの様々な法域から集めた2巻からなる『刑事法判例集』を独自に編纂し、1874年と1875年にそれぞれ完成させた。『マサチューセッツ州判例集』の第112巻から第114巻は1876年に彼が亡くなる直前に刊行された。

グリーンの追悼集会において、サイラス・コッブ（1874年法学士）は、次のように語った。「グリーン先生は気楽な感じで教室に入ってきて、コートを脱ぎ、おもむろに教科書を開くのだが、そこには何か特別な教育方法をとろうという様子はまるでなかった。教え方はいたってざっくばらんであった。しかし、いったん検討が始まると、とりわけ裁判所の実務に説明が及ぶと、グリーン先生が学生の理解を助けるために熱心に教えてくださっているということがわかった。先生が講義で取り上げた論点はまるで実際の法廷で習得したかのように、我々の心に鮮明に植え付けられたのである。」（Boston Globe, Oct. 25, 1876, p. 2.）1875年9月12日、グリーンのグラマースクールからの友人でかつ隣人でもあったチョンシー・ライトが亡くなるが、グリーンは彼の死に立ち会っている。

グリーン自身は、1876年9月8日、マサチューセッツ州ケンブリッジにおいて46歳で亡くなった。彼の妻は、彼が前の晩に特に変わった様子もなく帰宅したと述べている。妻が9月8日の正午まで待ってから彼を起こそうとしたときには、彼はすでに亡くなっていた。医者は死因を特定できなかった。一般に知られている死因は彼がアヘンチンキを大量に服用して亡くなったというものである。アヘンチンキは、アルコールとアヘンの混合物で、1876年には様々な病気の鎮痛剤として用いられていたが、時として、自殺の手段としても使われていた。マサチューセッツのウスターのある新聞は、グリーンの死から1週間後に、一方では、彼が「服毒自殺した」としながら、彼は自ら毒物を服用したのではなく「脳鬱血」で亡くなったとも報じていた。（Massachusetts Spy, Sept. 15, 1876, p. 3.）ハーヴァード大学のアーカイヴスには、彼がアルコール依存症で自ら命を絶ったとことを陰鬱ににおわせる資料が保管されている。（Louis Menand, The Metaphysical Club: A Story of Ideas in America 231（2001）（citing Harvard University Archives, HUG 300, file for Nicholas St. John Green）.）グリーンは、マウント・オーバーン墓地に埋葬された。

グリーンの死後、友人、同僚、そして学生たちがグリーンの思い出を語っている。グリーンの人柄に関する記述を以下にまとめてみた。

「本学年の終了とともに、死は、開校時から本校を支えてきた一人の指導者を奪い去った。講師であり、学科長代行であったN・セント・ジョン・グリーン氏は、多大なる貢献を果たしてきた。グリーン氏は、ボストンには本校のような学校が是非とも必要であるとの崇高なる信念を抱いていたのであって、本校の成功のためには尽力を惜しまなかった。学生に対しては、熱心かつ親身に接したのであり、学生たちは彼の思い出を大切に胸に抱き続けることだろう。」（Boston University School of Law, Third Annual Report, 1876, p. 27）

「彼は、雄弁家でも、法廷弁論の戦略家でもなかった。論理的思考、厳格な推論、そして緻密な調査という高度な分野で、彼は刑法の実務を行っていた。…彼は大胆かつ独創的にもの考え、自由に、忌憚なく自らの見解を述べた。彼は独自に調査し、思考を練ったのであり、誰の

前であろうと、臆することなく、真摯に信ずるところを述べた。つまるところ彼は天才的法律家であった。彼の実務は、法廷に立つ弁護士の一連の退屈さとは無縁であったし、もちろん事務弁護士にお決まりの単純作業ともかけ離れたものであった。…彼は暖かい心の持ち主で、友人の役に立つことなら、どんな犠牲も厭わなかった。」(Boston Daily Globe Sept. 13, 1876, p. 6)

「講師として、グリーンは、儀礼のような手続きではなく、原理を教え、世の中の意見ではなく正義を重んじた。法の尊重にかけては人後に落ちないが、彼が尊重したのは、理性と判断の法であり、些細な技術としての法でも多数者が与する法でもなかった。彼は常に粘り強く、寛大で、親切で、自らの時間や楽しみを犠牲にしても、真面目な学生を助ける労を惜しまなかった。」(Boston Journal, Oct. 24, 1876, p. 2.)

「社交法律図書室で質問のためにグリーン先生に近づくときは、たいていこうだった。彼はいつもの席で調べものをしている。最初は、多少迷惑そうに顔を上げるが、こっちが質問を終える前に、回答の準備がすでに整っている様子であるか、あるいは、椅子から立ち上がって、あっちの書棚こっちの書棚と駆け回り、必要な本を手元に揃え、席に戻り、こちらの質問に根気強く、懇切丁寧に答えてくださった。話題が一つの法領域から別の領域に移るときに、宗教分野であるとか好悪の問題に踏み込みそうになっても、彼は決して一線を越えることはなかった。今にしてわかるのは、彼の知性は、彼が信奉する科学を明確かつ断固として堅持しながら、心が固陋として閉ざされることはなかったということである。」(Cyrus Cobb, quoted in Boston Daily Globe, Oct. 25, 1876, p. 2)

「我々にしてみれば、グリーン氏は、その鋭敏な論理的精神と卓越した能力に相応しい正当な評価を受けたことはなかった。…グリーン氏の専門家としての人生は、後生大事にされていた理論や盲従されていた先例にとらわれることなく、彼の内なる力と信念を表明することのみに捧げられたのである。グリーン氏にとって、法とは正義であり理性であった。…しかし、多くの法原理や判決を研究したことのある者なら誰でも気がつくように、理性は必ずしも法の魂ではなく、しばしば理性の終わるところから法が始まることも彼は知っていた。講師としては、学生に問題を提示する際の明瞭さ、視覚的鮮やかさ、印象深さという点では、彼に並ぶ者はほとんどいなかった。彼は扱う問題に精通しているだけでなく、彼の話を聞く普通の人に対して、直截に、単純明快に、そして興味深く知識を伝授することができる見事かつ稀有な才能の持ち主であった。しばしば、ありきたりの説明に、架空の事実や出来事を加えることで、彼が学生の心と記憶に刻み付けようとした問題は、しっかりと学生に根付き、学生たちは一人残らずその射程を理解し、その応用を展開することができたのである。学生には、彼は常に異常なまでに人気があった。彼はその丁寧さ、懇切さ、そして親しみやすさによって、敬慕してやまない聴衆のみならず、多くの親友と熱烈な信者を獲得した。彼は他人の受け売りではなく、その内奥の信念を理路整然と説くことができた。裁判官の数の力とか、その居丈高な権威とか、あるいは彼らの露骨な反対にも動じることなく、彼は、裁判官が誤っていると、あるいは、裁判官が拠って立ったと主張する根拠や推論に十分には基づいていないと信じた場合、そうした法理や判決を決して受け入れようとはしなかった…彼は、折れることはあっても、曲が

ることのない枝のごときであった。…彼は自分の考えが人々から広く受け入れられていることが分かったときも、それを薄めて定型化しようとはしなかった。彼の性格は、その体格と同じように、直立し、独立し、自由であった。」(Boston Evening Transcript, Jan. 3, 1877, p. 6. 著者はホームズと思われる。)

「彼は誠に心優しき人であった。どんな人にでも溢れんばかりの親愛の情をもって接し、特に子供が大好きで、動物もこよなく愛した。また彼は趣味の良い詩の愛好家でもあり、相当な数の詩を読んでいた。しかし、当初、人々は、彼が現実を細かく観察する人であることよりも、彼の非現実に対する軽蔑に注目した。彼には一つの特性があって、それは決して粗野というのではなく、うまい表現が思いつかないが、ソクラテス式厳格さというようなものであった。この特性こそが彼の現実主義を固く支えたのであって、人は彼に接したときに、まるで精確なスケッチのような、実証的な喜びを授けられたのである。」(Peirce, AAAS (May 9, 1877), pp. 289, 291.)

「グリーン氏は強烈な個性の持ち主であった。彼は本校「ボストン大学」の発展に大いに尽力し、学生を愛してやまなかった。もし彼に教師として欠点があったとすれば、それは「先例拘束」の原理を軽蔑していた点であろう。彼は嬉々として判決を攻撃した。彼は大変人柄が良く、ときに生徒はその人の良さに乗じ、授業で検討している問題とは必ずしも関係のない質問をすることがあったが、彼はいつも快く質問に応じていたし、実際そうした質問を楽しんでいるようにもみえた。」(Swasey, 1 Green Bag 54, 57-58 (1889).)

「独特かつ独創的で因習の破壊者セント・ジョン・グリーン、…彼の見識の広さ、伝統への侮辱、先例への軽蔑は、新興で発展途上の学校の雰囲気を体現するものであったし、同校が古式ゆかしく由緒正しいものに隷従する道を歩むことを防ぐことに役立った。」(Kellen, 1897, pp. 6, 14)

「比類のない際立った性格ではあったが、セント・ジョン・グリーンは、「変人」ではなく、頭の中が広大で身体も頑丈で、そしてみなぎる力と天性の自信に光り輝いていた。彼は「法的精神」の持ち主で、明晰で力強い弁論をする能力が備わっていた。彼は主題に精通しており、彼の講義は学生で溢れかえり、皆その言葉に夢中になった。」(Kellen, B.U. L. Rev. Jan 1924, pp. 7, 10)

なお、グリーンがボストン大学ロースクールで1875年から1876年の学期に行った講義は、彼の生徒であった菊池武夫によって筆記されたが、その科目は、不法行為法、刑法、そしてケント・コメンタリーズであった。これらの科目は、1875年10月6日から12月18日にかけて講義されている。

1933年、リーガル・リアリズムの絶頂期に、グリーンの長男で、イリノイ大学の法学教授であったフレデリック・グリーンは、父がその短い生涯で発表した1869年から1876年にかけての論文、書評、判例評釈を編集した。そして、これは『不法行為法と刑法に関する論文集』とのタイトルのもと、ウィスコンシン州メナシャのジョージ・バンタ出版から211頁の本として刊行された。グリーンが書いた最初の論文「蓋然的原因と近接的原因」は、1937年にカンザスシ

ティ・ローレヴュー誌に「法学上の古典」として再掲され、1954年にはラトガース・ローレヴュー誌もこれを掲載している。この論文で、グリーンは、蓋然的原因と近接的原因との裁判上の区別は無意味であり、裁判官が留意すべきことは、合理的に予見できる結果のみであることを論証したのである。不法行為法に関する彼の小品において、グリーンは、これ以外の点では、近代主義者であった。彼は、被用者が他の被用者の過失によって被った傷害について被用者は使用者を訴えられないという寄与過失ないし共同被用者の法理に批判的であった。なお、これらの法理が廃止されたのは20世紀になってからである。一方、彼は過失責任の原則が不法行為責任の基礎として存続する—使用者の代位責任がその顕著な例外ではあるとしても—ことを疑わなかった。彼は、損害の分散の原理によって過失が取って代わられるとは思わなかったのである。オリヴァー・ウェンデル・ホームズ・ジュニアが1871年のグリーンの本について述べた不法行為法は「法律書には不向きな科目」という寸評は、今では、グリーンが不法行為法について述べたどんなことよりも、記憶されている。ホームズの目には、不法行為法は、雑多な訴訟の寄せ集め—あるものは物の占有に関係し、別のものは刑法に接し、また別のものは別立てで論じられるもの—にしか映らなかったのである。一方、グリーンにとっては、不法行為法について講義し、書物を著すことは、この科目をロースクールのカリキュラムにおいて、一つの体系的で重要な基礎科目とするためにはどうしても必要なことであった。

刑法に関する出版物において、彼は刑事被告人保護の立場であり、報復または一般予防のために厳罰を求めるのではなく、寛大と慈悲を訴えた。彼は、心神喪失、未成年、事実または法の錯誤、そして緊急避難の場合には故意の程度が減じるとする心理学に相当の関心を抱いていた。彼はまた依頼人を代理する弁護士の代理権、婚姻した女性の行為無能力、さらには、フランス法と英米法の不法行為法の比較についても短い論文を書いた。

グリーンは、1874年から1875年のロースクール年次報告書（p.16）で、自らのジェームズ・ケントのアメリカ法コメンタリーズに関する講義について「ケント・コメンタリーズに基づく私の講義の目的は、同書で取り扱われた個々の論点を網羅するのではなく、法を全体として論じることであった」と述べている。彼が講義で使用したものは、1873年に出版され、オリヴァー・ウェンデル・ホームズ・ジュニアが編集した第12版であった。グリーンは、ケントの４分冊にわたる68の講義項目のすべてを扱おうとはせず、その授業では、法源、制定法解釈、憲法上の権利、家族法（親族法）、環境法、人的財産法、無遺言相続財産の管理、そして、代理法が講じられた。これらの講義ノートでグリーンが引用した新しい判例は、学生に教科書指定したケント・コメンタリーズの前述の版には見当たらず、グリーンはこれを補っていた。

ニコラス・セント・ジョン・グリーンは、その知力の絶頂にあり、彼が教鞭をふるった学校において指導的役割を果たしていたそのさなかに急逝した。すでに不法行為法の分野では学者として影響力を持っていたが、不法行為法は言うに及ばず、さらには刑事法、またこの講義ノートが示しているように憲法の分野での一層の貢献が期待できた。彼の突然の死に先立って公けにされた業績は、彼が研究を重ねてきた諸分野における彼の学殖のごく一部にすぎない。菊池武夫が筆記し、幸運にも125年以上も日本で保存されてきたこの素晴らしい講義ノートの

おかげで、今やセント・ジョン・グリーンの講義は、法学、法史学、そして法学教育史学の専門家の利用に供されることとなった。これらの講義ノートによって、グリーン自身、ボストン大学ロースクール、そして日本人初の卒業生である菊池武夫についての理解が深まることだろう。

（翻訳　北井辰弥）